

研修報告書 No 1

東邦大学医療センター大森病院 落裕太先生

研修施設：佐川町立国保高北病院

四万十町国保大正診療所

地域医療実習を終えて感じたこと

私の研修先では2年目に地域医療を1ヶ月間選択するにあたり高知県の佐川町立高北国民健康保険病院と土佐大正診療所の2箇所研修させて頂きました。怒涛の大学病院での研修を1年間終えた時点で、色んな疑問にぶつかりました。1つは大学病院では主に急性期の患者さんの治療に当たり症状が軽快すれば退院または他院へ転院という形が主流でありその後のfollowはあまり関わることはありませんでした。そのため、その後の患者さんがどのようになったかを知らないままでいいのかという気持ちが少なからずありました。

また同時に他の先生方から他病院での経験は必要だという勧めもあり今回貴重な地域医療を高知県で希望させて頂きました。

高北病院と大学病院の違いはなにかといえば何もかも違うというのが正しいと思います。印象に残ったことをいくつか挙げたいと思います。

まず、病院の機能、規模が異なっています。具体的には外来待ちの廊下の賑やかさも明らかに異なっていました。地域密着型の病院であるためまた町自体もさほど大きくないために外来を待っている患者さん同士が顔見知りで、待ち時間に世間話をなさっていました。また患者さんと看護師さんが通りすがりにお話しているのも暖かい光景に見られました。自分の勤務先病院では見られない、病院が町全体を診ている感じがして非常に心温まる光景でした。

次に医師不足が挙げられると思います。高北病院は内科医が5人、整形外科医が2人産婦人科医1人の計8人で佐川町1万4千人の住民、近隣の市町村の患者さんを一手に引き受けています。また病床数は108床もあるために受け持ち人数は20人から30人です。大学病院ではなかなか考えられない状況でありました。またその状況で診療科関わらず当直を行っている状況でした。どうすれば回せるのかとも思いましたが現実問題として起きている状況でした。また3日のみの研修であった大正診療所は常勤医2人で毎日患者さんの外来、入院の対応に追われて、また検査技師さん1人でX線写真、エコー、腸造影を行っており息つく暇も無く対応に追われていました。

またデイケアや訪問診療などに行かせて頂き、高齢者の方と接するのも私にとっては“新鮮”でありました。訪問診療では中核病院から地域に戻ってこられた患者さんの継続的な治療を経験でき非常に有意義なものでありました。具体的に在宅で治療していらっしゃる患者さんは家族との同居が6割程度でありました。一人暮らしの方もいらっしゃるの方々の中々体調不良時に病院へ行くことが困難なために訪問以外に定期的にケアマネージャーさんが訪問して状況を伺っていたりしました。また病院自体もなるべく在宅医療を推進すべく患者さんとまた家族との関係を密に取っていらっしゃいました。またデイケアでは高齢者の方々が楽しくおしゃべりをしたり、佐川町で行われている百歳体操を行ったりしていました。具体的には軽い重り

を両腕、両足につけ筋力維持を行うものでありました。佐川町の高齢者の方々は皆さん同年代の方々よりも有意に筋力差があると感じました。

今回の地域医療で得たものは無数にあります。まずは様々な手技の習得がしやすいという点です。背景として医師不足がありその分検査も1人でやることが多くなり手技の習得がしやすいという利点があります。また地域の方々の暖かいお言葉にも勇気を頂きました。

機会がありましたら大自然に囲まれている高知県で研修を再度行いたいと思います。

最後にお世話になりました、病院関係者の方々、地域の方々に心から御礼を申し上げたいと思います。